# 管内家きん飼養農家における飼養衛生管理向上への取組

紀北家畜保健衛生所
○亀位徹　赤真寛美
小松広幸

【背景および目的】

2016年度は国内の死亡野鳥からの高病原性鳥インフルエンザ（HPAI）ウイルス分離例が過去最多となり、また、家きん飼養農家でもHPAI発生が相次いだ。国は『平成 28 年度におけるHPAIの発生に係る疫学調査報告書』を公表し、改めて、野生動物や野鳥の家きん舎への侵入が高リスクであることが示された。

国内のHPAI発生状況を受けて、管内の家きん農家から家きん舎（平飼い、肥育舎）の修繕について相談があり、飼養衛生管理向上のための指導を行った。当農場は、以前は獣医師がおり対策がとれていたが、今はおらず飼育に不安が大きかったという状況であった。

【方法】

家きん舎が空舎期間中に、飼養担当者と共に飼養衛生管理基準に基づき家きん舎の点検を行った。また、改めて飼養衛生管理基準について飼養担当者に説明し、消毒等の衛生管理の指導を併せて実施した。点検は要修繕箇所を確認しあい、修繕策の方向性について検討を行った。また、衛生管理区域境界の車両消毒の仕方や車両進入制限対策について、より農場の実情に沿うように改善提案をした。その後、具体的な修繕方法について複数回の話し合いを行い、対策内容を更新した。最終的に家きん舎の飼養担当者が修繕を実施し飼養衛生管理向上につなげた。

【結果】

農場の出入口は１箇所で、事務所の前を通り、衛生管理区域に向かう動線となっていた。衛生管理区域内には、飼料庫とフェンスで囲われた家きん舎敷地があった。また、農場敷地内には畑があり、畑へ向かうには衛生管理区域を横切る必要があった（図1）。

車両対策として、農場の入口には消石灰帯と消毒マット、衛生管理区域の入口には消石灰帯と動力噴霧器、家きん舎の敷地入口には消石灰帯による消毒箇所を設けていた（図2、3、4）。

人対策としては、事務所で記帳、手指消毒、靴底消毒、農場専用の衣服と長靴に更衣を行っていた。衛生管理区域入口にも踏み込み消毒槽を設置していた。家きん舎には、家きん舎専用の更衣場所があり、手指消毒、踏み込み消毒槽等を設置していた（図5）。

家きん舎は、元牛舎を改築した鉄骨組で、天井が高く、長軸方向の両端にスライド式扉があり、窓が多い構造であった。窓や換気扇、

スライド式扉の開口部は外側から二重に金網を設置していた。しかし、家きん舎周囲に廃材等を放置していたり、不必要な雑木や、雑草が生い茂っていた（図6）。家きん舎の水は沢水を塩素消毒して利用し、定期的に点検を行っていた。飼料庫は密閉でき、小型野生動物も侵入できない構造であった（図7）。

主な要修繕箇所は、「家きん舎の四隅の隙間、天井と壁の隙間、排水口の金網設置（図8）、出入り口のスライド式扉と壁の隙間（図9）」等で、小型野生動物の侵入防止対策に関することであった。

修繕方法は、主な隙間は金網やネットで覆ったり、丸めた金網を詰め込み塞いだ（図10）。天井と壁との小さな隙間はウレタン等で塞いだ。また、出入り口は隙間をできるだけ埋めて少なくしたうえに、外側を庇から扉全体を防鳥ネットで覆うようにし、小型野生動物の侵入を難しくした（図11、12）。使用した金網やウレタン等は農場内にあった資材を利用した。防鳥ネットは新たに市販のものを購入し利用した。

改善提案は、車両消毒をより簡潔にまた管理しやすくなるように、農場入口は消石灰帯だけとし、衛生管理区域入口は動力噴霧器で消毒してから消石灰帯を通るように変更した。また、畑へ通行する車両が誤って家きんを飼養するエリアへ近づかないように、飼料庫前に車両進入制限を設けた。家きん舎周囲の植栽は伐採、下草を刈り、家きん舎周囲を整理整頓するよう日頃の作業項目に追加した（図13、14）。

【考察】

管内の家きん飼養農家の中でも、比較的危機意識の高い農家であったが、指摘箇所を双方で確認しあい、最終的に改善につなげられたことで、よりいっそう飼養衛生管理意識が高くなった。また、家きん舎とその周囲について対策を行ったことで、小型野生動物の侵入防止効果もよりいっそう高くなった。

今後もこういった改善を、家きん農家や家きん舎ごとにきめ細やかに実施することで、管内の家きん農家の飼養衛生管理意識の維持向上に努めたい。特に家きんを飼養していない空舎期間中には、外側からも中側からも家きん舎の隅々まで点検ができるので、今後とも実施していきたい。